



TITLE:

新寫譯本曆算全書に就て

AUTHOR(S):

能田, 忠亮

CITATION:

能田, 忠亮. 新寫譯本曆算全書に就て. 東洋史研究 1940, 5(2): 147-150

ISSUE DATE:

1940-01-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/145673>

RIGHT:

新寫譯本曆算全書に就て

能 田 忠 亮

明治五年の改曆以來六十有七年を経た今日の我國は、最早歐米の文化を直譯的に或は盲目的に受け容れる時代を脱し、今や世界最高の文化を東亞に樹立せんとするの大勢に向ひつゝある。思ふに明治維新以來我國に於て西洋の諸學術が極めて敏速に且つ手際良く採用されたのは、偉大なる歴史に依つて薰育されて來た力強き國民性に基くのであるが、其の手近き素地は、徳川幕府の中葉以來、少數乍ら不屈不撓の洋學者達に依つて培養されたものと見ざるを得ない。殊に徳川八代將軍吉宗が大英斷を以て洋書の禁を解いたことが、今日の洋學を隆盛ならしむるに大いに役立つたものであることは言ふ迄もない。之より先き、徳川幕府は天主教の勲絶に忿であつて、三代將軍家光の時、天主教を奉ずる一切の西洋諸國と交通を絶ち、一切の洋書原本並に漢譯洋書の輸入を嚴禁し、寛永七年には禁輸書籍を

列記した「御禁書」を發布するに至つた。併し和蘭のみは此の間に在つて渡海御免とあつて長崎に於て交通貿易を許されたので、「公方様阿蘭陀御覽」の事などもあつて細々乍ら泰西の文化は我國に入り込んで來ては居た。吉宗が享保元年に將軍の要職に就くや、所謂公方様阿蘭陀御覽に依つて泰西の事情を知り泰西の知識を得るにつけ泰西の文明學術に學ぶ可き事の餘りに多きに驚嘆した事であらう。而も吉宗が禁書の令を解くに至つた直接の動機は、天文學即ち曆學の研究に在つたといふ事は學者の異存なき所であり、何人も疑はざる所である。吉宗は農業は立國の基であると信じて居た。乃ち春夏秋冬種時きより稻刈に至るまで民に正確な時を授け以て五穀豐饒天下泰平ならしめる事が爲政者の重大なる責任である事を深く自覺して居たのである。然るに従來の曆は太陰太陽曆であるから二三年の

間に必ず閏月を置かざるを得ざるの不便あるを免れないので、吉宗は常に此の改良に心懸け、關孝和の高弟建部賢弘の推舉に依り中根元圭に此の事を圖られた。

中根は本邦曆學の不正確なる所以を述べ西洋曆を參考する必要があることを論じ、之が爲めには洋書の禁を緩にしないでならぬ事を建言したので、吉宗も然らば切支丹宗門以外の書籍は解禁するといふ事になつたのである。之は享保五年の事で寛永禁制以後九十年を経て居る。斯くて吉宗は遂に太陰太陽曆を襲用するの不可を覺り太陽曆を採用せんとした程であつたが、周圍の物議を慮つて遂に之を斷行する事は出来なかつた。

併し吉宗が此の如く天文學に意を用ひ、元文三年に和蘭の天文書を獻ぜしめ、これを讀まんが爲めに青木昆陽をして蘭語を學ばしめ、更に延享元年には江戸に天文臺を建て、之に自製の簡天儀を設置した程であつた。後、十一代將軍家齊の時、文化八年に至りて此の天文臺に翻譯局を置き蠻書和解方と稱したのが官學としての洋學の始まりであり、之がやがて蕃所調所（安政二年）洋書調所（文久二年）開成所（文久三年）等と改稱し幾多の變遷の後、明治以後に設立された東京大學の前

身となつたものであるといふことは、我國文化史上特筆すべきことである。

さて吉宗が享保五年に禁書の令を解いてから七年目の享保十一年には梅文鼎の曆算全書が支那から長崎に齎らされ、同十三年に中根元圭がその一部を翻譯し、享保十八年の正月には新寫譯本曆算全書が完成したのである。此の本は今、宮内省圖書寮の所藏であるが、卷頭に建部賢弘の叙が見えて居る。即ち、

宣城梅文鼎書三十種。題曰曆算全書。專言西洋曆學。有筆算、算、算、三角線、割圓、八線諸法。最見其奇。割圓八線特爲曆家捷徑。回回西洋諸曆議論彬如可觀。又有日月食蝕算定用分、蝕起方位、實前世未發。其超軼他書、也可知也。且夫十二宮衆位名。釋形象之類。足以識天球圖象。偉矣。梅氏之學。可謂勉矣。此乃享保丙午歲海舶齎來我崎陽者。府尹輪諸官府。以賢弘之旁通曆術也。令中使傳命校之。且識其概。臣春愚材。加以狗馬老驥曷勝酬盛意。而辱廣異聞。遂上書騰寫一部。令平璋中根氏譯之。詣闕進。竊以唐虞之世。璿璣玉衡。以齊七政。謹授民時。爾來歷世相因。曆道之

係^ル治體^ニ。豈^ニ小小^{ナラシ}哉^ニ。雖^レ然^ニ代^ニ異^ニ家^ニ殊^ニ異^ニ言^ニ齟^ニ起^ニ。薦紳諸子。往往有^レ發^ニ其^ニ秘^ニ。亦但不^レ過^ニ成^ニ中夏^ニ之言^ニ。沈潜堪輿。其豈一家所^ニ能^ニ盡^ニ。越^ニ迨^ニ未^ニ明^ニ氏^ニ。西洋李瑪寶以^ニ其^ニ學^ニ風^ニ靡^ニ一世^ニ。故^ニ弇州^ニ王子^ニ有^ニ言^ニ。迨^ニ後^ニ世^ニ加^ニ詳者^ニ此^ニ技^ニ也。知^ニ言^ニ哉。臣^ニ謂^ニ西^ニ土^ニ曆^ニ比^ニ之^ニ中^ニ夏^ニ。其淺深猶^ニ皮^ニ相^ニ之^ニ與^ニ骨^ニ髓^ニ。而國家故事。嚴^ニ禁^ニ耶^ニ蘇^ニ。凡有^ニ天主^ニ耶^ニ蘇^ニ號^ニ及^ニ李^ニ瑪^ニ寶^ニ等^ニ之^ニ姓^ニ名^ニ者。不^ニ問^ニ書^ニ好^ニ否^ニ。一切焚^ニ諸^ニ畸^ニ陽^ニ地^ニ。西^ニ曆^ニ之^ニ不^ニ講^ニ。以此大^ニ哉。

昭代文運日^ニ升^ニ。明明在上。以明^ニ庶^ニ物^ニ。遂^ニ及^ニ曆^ニ術^ニ深造^ニ其^ニ妙^ニ。廼^ニ行^ニ畸^ニ陽^ニ。除^ニ焚^ニ書^ニ之^ニ令^ニ。曆算全書因至焉。可^ニ謂^ニ得^ニ言^ニ西^ニ曆^ニ之^ニ助^ニ矣。臣^ニ賢^ニ弘^ニ欽^ニ奉^ニ敬^ニ。敢撰^ニ數^ニ語^ニ辯^ニ其^ニ端^ニ者。如此。

享保癸丑之春正月 建部氏源賢弘誌

とあり、新寫譯本(全四十六冊)成立の次第誠に明確なるものゝ如くである。

さて單に梅文鼎の曆算全書といつても原刊本(六十卷)、四庫全書本(六十卷)乾隆間補刻本、雍正元年魏氏兼濟堂刊本(七十五卷魏荔彤輯楊作枚訂)等があるのであつて、此の新寫譯本は雍正元年の鐫である。雍正元年といへば我國の享保八年で、之が我國に齎らさ

れたのが享保十一年であるから鐫後僅に四年を出でぬわけである。之は些か注目値することに思はれる。今其の編目を見るに、

法原 平三角舉要五卷、勾股闡微四卷 首卷楊著、弧

三角舉要五卷、環中黍尺五卷、壘堵測量二卷、方圓羈積一卷、幾何補編五卷、解八線之根楊著。

法數 割圓八線之表二卷。

曆學 曆學疑問三卷、曆學疑問補二卷、交會管見一

卷、交食蒙求三卷 日食月食、揆日候星紀要一卷、歲月地度合攷一卷、春秋以來冬至攷一卷、諸方節氣加時日軌高度表一卷、五星要略二卷、楊著一卷、火星本法一卷、七政細草補註一卷、仰儀簡儀二銘補註一卷、曆學駢枝四卷、授時平立定三差解一卷、曆學答問一卷。

算學 古算演略一卷、筆算五卷、籌算五卷、度算釋

例二卷、方程論六卷、少廣拾遺一卷

の如きもので、全く西洋の曆算を述べたものである。此處には一々曆算全書の各卷に就いて専門的論述は試みないが、中根元圭の手に成つた譯本曆算全書が當時

の天文方の役に立つた事は非常なもので、後學の徒をして西洋曆算の理解を容易ならしめた事は言ふ迄もないことで、後世、洋學を隆盛ならしめる原動力となつたものである。而も面白いと思ふことは、中根元圭が禁書の令を解く事を進言した人であり、又實際解禁となつてから輸入された梅氏曆算全書を譯述したのも中根元圭であるといふことである。又當時迄の我國に於ける天文曆法は全く支那のそれに基いて居たのであつて、其の支那を経て西洋天文曆算が梅氏曆算全書に依つて我國に輸入されたといふ事は、我國天文曆算史上特筆すべき事であり、天文曆法を通じて我國が如何に支那と密接な關係にあつたか解る。

因に中根元圭の名は璋で元圭は字である。丈右衛門と稱し、號は律聚(律製)で、寛文二年近江國淺井郡八木濱村に生れ家業は醫である。後、京都に出て白山二條上町に住み、長じて江戸に出て建部賢弘に學び、正徳元年京都銀座役人となり又その教育に當り、主として白山に住んだので時人は中根を白山先生と呼んだ。

中根は數學、天文、曆學のみならず、漢學、醫學を明にし、音律の研究も深く、俗樂改良に志したといはれ

て居る。享保十八年京都で、其の師、建部賢弘に先じて歿したのであるが、此の年始に師の手に依つて新寫譯本曆算全書叙が撰せられたのである。

尙、梅文鼎のことや、曆算全書それ自體に就いて略述すべきであるが、之は別の機會に譲りたい。

最後に一言附加しておきたいことがある。即ち私が此の新寫譯本曆算全書を宮内省圖書寮に訪ねたのは昭和六年のことで、それは今は亡き内藤湖南先生の教示に基いたといふ事である。私は湖南先生の門下生諸子の様に先生から直接教を受ける機會に恵まれなかつたけれど、昭和六年四月下旬恭仁山莊に先生をお訪ねして研究上種々御注意を賜はつた事がある。其の節此の新寫譯本のことを教へて戴いたのであつて、殊に感銘深く今尙耳底に残つて居る事は、支那の天文曆算を研究するには、我國の徳川時代のものから出發す可きである事を懇々と諭して戴いた事である。此の事が私の研究生活上何れ程役立つたか量り知れぬものがある。茲に附記して湖南先生に深く感謝する次第である。

(昭和十四年十一月二十八日記)